

野上 祐作〔岡山理科大学教授〕

文明のジレンマ



環境の良し悪しは、時間軸・空間軸の中で相対的に論じられる場合が多い。人生経験が豊富な人は昔と今の比較を語り、あちこち旅をする人は場所間の比較を語る。しかし、新たに生まれてくる子どもにとっては、生まれた時、生まれた場所が環境の認識の出発点である。つまり、その時点で比較する対象を持ち合わせていない。環境の良し悪しを論ずるためには、何らかの体験を要する。都会の子供たちが川の源流に行けばそこの水のきれいさに感動する。青葉が芽吹く森林の中を歩けば、空気のさわやかさを実感する。そして、都会に戻れば、何となく空気の汚さ、川の汚さを覚える。

私たちは、都会の空気を森林の中で体験した空気に変えたいとか、

近くを流れる川の水を山に変えたいと言わない。山には山の環境があり、都会には都会の環境がある。どんなに逆立ちしても、中国の黄河の濁流を熊野川の清流に変えることはできないことを知っている。同じ場所で生活を重ねていくと、昔と今を比べることができ。昔が良いか今が良いか昔はともかく、その当時の記憶をたどることができる。吉井川の中流で育った私は、夏になると友達と一緒に川に泳ぎにいった。今では川で子どもが泳ぐ光景は見られない。子供たちは学校のプールで泳いでいる。子どもはプールで泳ぐものだと思っている。大人たちは、そのほうが安全だときどき事故は起きる。川で泳ぐのとどちらが面白いかは体験した人でないとわからない。しかし、今の川は昔とすっかり変わった。川が子どもにとってつまらなくなったり、治水工事で河岸が整備された。瀬化が少なくなったり、洪水対策

も然るものながら、子どもにとっても楽しい川をつくることはできないものか。それには金がかかるといってもいいのではないか。

ひとしきり川で遊んだ後に井戸水で丸ごと冷やしたスイカを食べた。私の田舎の家は井戸水は一年を通してほぼ十八度であった。夏、十八度といえば冷たい。逆に、冬、十八度といえば暖かい。今では、このような井戸を見ることはない。水道が普及してから井戸は消えた。最近、地球温暖化対策でエネルギーの節約が叫ばれているが、今のように電気製品で囲まれていなくなった時代には、暑さ寒さに対してそれなりの工夫をしながら省エネの生活をしてきたように思われる。

子供たちに太陽の光で熱く焼けた川原の石ころの上を歩くあの快感を味わわせてやりたなど、ノスタルジックに思いをめぐらせ、冷蔵庫で冷やしたスイカを冷房の効いた部屋で食べながら文明のジレンマを反芻している。

野上 祐作氏

1943年生まれ。岡山県出身。岡山理科大学環境教育地域支援研究会代表。(財)おわかやま環境ネットワーク理事長。私立大学環境保全協議会顧問等。